

# 社会福祉現場実習の現状

牧野田 恵美子 須之内 玲子  
小山 聡子 中谷 陽明

## Current Situation of Social Welfare Fieldwork

Emiko Makinoda Reiko Sunoutsi  
Satoko Oyama Yomei Nakatani

1998（平成10）年度から2000（平成12）年度までの3年間の社会福祉現場実習の実習生アンケートをもとに、実習成果と課題について述べた。なお、このアンケートは、社会福祉士国家資格対応の実習だけではなく、資格取得に対応しない施設の実習も少数であるが含まれている。

多くの学生が、実習は「勉強になった」と考えており、真面目に実習に取り組んでいる。実習の内容は、同行訪問や同席面接、「ケース記録を読んだ」り、ケアワーク実習が多く、利用者とはじっくり話をしたり面接をすることは少ない。また、実習で勉強になったことは、「現場のことがよく分かった」、「専門職の意見を聞くことができた」、「自己覚知に役に立った」であった。学生が考える実習の目的は、「現場のことを知りたい」、「社会福祉士の資格を取るため」が1、2位を占めた。

キーワード 社会福祉現場実習、社会福祉士、後継者養成、スーパービジョン

### はじめに

社会福祉士資格が創設され、2001年度は14回目の国家資格試験が行われた。その間、大学をはじめとして養成施設は、実践的教育を取り入れ社会福祉実践・専門家養成に力を入れるようになっている。実習教育も同様であるが、学校間あるいは養成施設による差が大きい。そこで、厚生労働省は、1999年、11月、社会福祉養成カリキュラムの内容を変更、改正した。実習には配属実習だけではなく、事前・事後学習が重要であるといわれているが、これまでのカリキュラムではその分けがなかったが、「社会福祉援助技術現場実習指導」と「社会福祉援助技術現場実習」との2科目

で実習教育を行うこととなった。

わが社会福祉学科では、当初から実習の事前・事後学習に力を入れており、分野別にグループを分けて教育を行ってきた。しかし、実際には事前学習13～14回の学習で実習で現場の実践に耐えられるだけの理論・技術を身につけているかといえば決して充分であるとはいえない。たとえば、実習分野についてみると障害者分野に実習に行く者は、障害者福祉論を履修することが課せられるなど実習前に履修しなければならない学科目を明示しているが、それでも実習に必要な学習がされているかという点決して充分ではない。それは、他の分野についても同様である。

「社会福祉援助技術現場実習」の目標は、

- ①現場体験を通して社会福祉専門職(社会福祉士)として仕事をするうえで必要な「専門知識」、「専門技術」及び「関連知識」の内容の理解を深める。
- ②「専門知識」、「専門技術」及び「関連知識」の内容を実際に活用し、相談業務に必要となる資質・能力・技術を習得する。
- ③職業倫理を身につけ、福祉専門職としての自覚に基づいた行動ができるようにする。
- ④具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し、理論化し体系だてていくことができる能力を涵養する。
- ⑤関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解する。

となっている。<sup>1)</sup>

これらを真に理解し、ソーシャルワーク能力、技術を習得させるのは、大変難かしといえるが、目標に向かって進んでいく必要がある。

## 2 実習アンケートの概略

そこで、1998(平成10)年度から2000(平成12)年度までの3年間の社会福祉現場実習の実習生アンケートをもとに、実習成果と課題についてまとめた。なお、このアンケートは、社会福祉士国家資格対応の実習だけではなく、資格取得に対応しない施設の実習も少数であるが含まれている。

実習分野をみると、心身障害児者福祉施設が23%を占め最も多く、次いで福祉事務所、児童福祉施設、老人福祉施設となっている(表1)。これら実習生の95%が社会福祉士資格を取得する予定である(表2)。

## 3 実習の成果と学生の態度

実習の成果については、7割以上が、「大変勉強になった」答えており、「ほとんど勉強にならなかった」と答えた者はいない。「あまり勉強にならなかった」者が1%あった(表3)。

表1 実習分野

	1998	1999	2000	計	%
福祉事務所	25	19	15	59	18%
児童相談所	16	16	13	45	14%
児童福祉施設	17	26	14	57	17%
心身障害児者施設	27	29	19	75	23%
老人福祉施設	19	23	15	57	17%
医療・精神保健施設	7	5	5	17	5%
その他	3	12	8	23	7%
	114	130	89	333	100%

表2 社会福祉士の資格取得について

	1998	1999	2000	計	%
取得する	112	121	83	316	95%
取得しない	2	8	4	14	4%
NA	0	1	2	3	1%
	114	130	89	333	100%

勉強になったことは、「現場のことが良く分かった」が31%、次いで「現場職員の意見を聞くことができた」が23%であった。3位が、「自己覚知に役立った」で18%であった。一方「ケース

ワーク、グループワークの技術を高めることができた」者は少なかった(表4)。実習できた内容は、「ケース記録を読むことができた」が80%で最も多く、次いで「直接介護したり、子供と関わるこ

表3 実習の全体的成果

	1998	1999	2000	計	%
大変勉強になった	79	102	63	244	73%
勉強になった	33	27	25	85	26%
あまりならなかった	1	1	0	2	1%
ほとんどならなかった	0	0	0	0	0%
NA	1	0	1	2	1%
	114	130	89	333	100%

表4 勉強になったこと(複数回答 3ヶ選択)

	1998	1999	2000	計	%
現場について	99	118	79	296	31%
専門職員の意見を聴けた	80	90	49	219	23%
利用者の援助に関われた	31	37	24	92	10%
利用者の考え・生活・ニーズを知れた	50	54	44	148	16%
CW/GWの技術を高められた	4	3	4	11	1%
自己覚知に役立った	49	72	49	170	18%
その他	2	3	5	10	1%
	315	377	254	946	100%

表5 実習内容(複数回答)

	1998	1999	2000	計	%
同行訪問や同席面接ができた	61	57	48	166	49%
ケースを担当できた	14	22	3	39	12%
利用者とはじっくり話をしたり、面接ができた	25	32	33	90	27%
直接介護をしたり、子供と関わることができた	65	87	57	209	63%
グループに参加した	28	33	25	86	26%
他施設を訪問した	65	61	45	171	51%
役割をもって参加できた	19	27	17	63	19%
ケース記録を読めた	94	105	68	267	80%
スーパービジョンを受けた	30	35	28	93	28%
諸会議に出席した	62	62	51	175	53%
その他	5	10	7	22	7%
	468	531	382	1381	

N = 333

表6 実習の自己評価（複数回答）

	1998	1999	2000	計	%
真面目に取り組んだ	104	116	81	301	90%
積極的に取り組んだ	51	85	39	175	53%
不真面目だった	0	1	0	1	0%
やる気がなかった	1	0	0	1	0%
消極的だった	11	7	14	32	10%
	167	209	134	510	

N = 333

とができた」63%、「諸会議に出席した」53%となっており、「同行訪問や同席面接ができた」は50%であった。厚生労働省が実習に期待する相談業務に必要な能力、技術の習得のための「利用者と同じく話しをしたり、面接することができた」者は27%にすぎなかった（表5）。

学生の実習への自己評価は、9割の学生は「真面目に取り組んだ」。「積極的に取り組んだ」者は約半数であった。また、消極的なものも1割弱おり、その理由として「事前の勉強が足りなかった」と自己の勉強不足をあげている（表6）。

#### 4 実習プログラム、実習指導について

実習プログラムについてみると、「だいたいのプログラムが用意されていた」が50%、「詳細なプログラムが用意されていた」が18%あった（表7）。「詳細なプログラムがあった方がよい」については、「どちらかといえばあった方がよい」が56%で、「是非あった方がよい」は24%であった。実習指導内容についてみると、「実習課題に基づいていたように思う」が35%、「時々、課題に沿った指導がされた」が27%であった（表9）。

指導体制については、「実習部署が変わるごとに指導職員も変わった」が31%で次いで「常時、特定の複数の指導職員であった」が23%であった。「その日によって変わった」も21%あった。これ

は、施設が交代勤務だったりして、決まった担当者が指導することが困難な状況を反映しているようである（表10）。

「スーパービジョンや指導職員との話し合いを何回か持った」ものが7割弱いた。しかし、「全くなかった」者も約1割あった（表11）。スーパービジョンが「役に立った」者は44%、「大変役に立った」者が27%いた。スーパービジョンでは、「あらゆる角度からわかりやすく説明を受けた」「自分が気付かない点の指摘をしてもらった」などの自由記述があり、スーパーバイザーから効果ある指導を受けている者がいる一方、「スーパービジョンは役に立たなかった」と答えている者も4%いた（表12）。

「指導職員の指導方向・方法」についてみると、「知識教育」が34%、「技術教育」が21%であった。そこでは、「多くを経験し、現場を理解するような指導」や「どのような援助が最適かを考えさせるような指導」などをしてもらえた者もいた（表13）。

表7 社会福祉実習受入・指導のプログラムが用意されていたか

	1998	1999	2000	計	%
詳細なプログラムが用意されていた	19	26	16	61	18%
だいたいのプログラムが用意されていた	61	63	47	171	50%
実習に入ってから状況を見て、プログラムが用意された	14	20	12	46	13%
用意されていなかったが、行事がある時等は用意されることもあった	9	8	6	23	7%
全く用意されず、自主的行動に任されていた	8	9	6	23	7%
その他	6	7	4	17	5%
	117	133	91	341	100%

表8 詳細な実習指導プログラムはあった方がよいか

	1998	1999	2000	計	%
是非あった方がよい	23	30	27	80	24%
どちらかと言えばあった方がよい	67	71	48	186	56%
どちらとも言えない	22	24	13	59	18%
どちらかと言えない方がよい	1	3	1	5	2%
ない方がよい	1	2	0	3	1%
	114	130	89	333	100%

表9 実習指導内容は実習課題に基づいたものであったか

	1998	1999	2000	計	%
常に課題を意識して実習指導がなされた	26	20	15	61	18%
時々、課題に沿った指導がなされた	34	34	23	91	27%
はっきりわからないが、基づいていたように思う	35	46	35	116	35%
あまり課題に基づいていたと思わない	16	27	15	58	17%
まったく課題に基づいていなかった	2	4	1	7	2%
N A	1	0	0	1	0%
	114	131	89	334	100%

表10 指導体制について

	1998	1999	2000	計	%
常時、1人の指導職員であった	18	21	19	58	17%
常時、特定の複数の指導職員であった	28	30	19	77	23%
実習部署が変わるごとに指導職員も変わった	33	43	31	107	31%
その日によって変わった	26	30	15	71	21%
その他	12	11	6	29	8%
N A	0	0	0	0	0%
	117	135	90	342	100%

表11 スーパービジョンや指導職員との話し合い

	1998	1999	2000	計	%
何回か持った	76	88	64	228	68%
1回のみだった	10	19	10	39	12%
全くなかった	15	14	6	35	11%
その他	9	9	9	27	8%
NA	4	0	0	4	1%
	114	130	89	333	100%

表12 スーパービジョンについて

	1998	1999	2000	計	%
大変役立った	28	36	27	91	27%
役立った	52	54	39	145	44%
あまり役立たなかった	11	12	7	30	9%
役立たなかった	3	9	2	14	4%
NA	20	19	14	53	16%
	114	130	89	333	100%

表13 指導職員は主にどのような方向で指導したか

	1998	1999	2000	計	%
知識教育が主であった	41	43	34	118	34%
技術教育が主であった	24	27	23	74	21%
実習生の自己理解が主であった	27	25	14	66	19%
どちらとも言えない	22	32	15	69	20%
その他	7	8	8	23	7%
	121	135	94	350	100%

表14 施設側の受け入れ

	1998	1999	2000	計	%
よく受け入れられていた	58	65	40	163	49%
どちらかといえばよく受け入れられていた	46	48	35	129	39%
どちらとも言えない	9	14	13	36	11%
あまり歓迎されなかった	0	3	1	4	1%
全く歓迎されなかった	1	0	0	1	0%
	114	130	89	333	100%

表15 施設側の実習生受け入れ意識

	1998	1999	2000	計	%
後継者養成として受け入れていたように思う	79	78	47	204	59%
大学からの依頼で仕方なく受け入れていた	10	7	6	23	7%
労働力を当てにして受け入れていた	6	11	9	26	7%
特にこれといった考えはなかった	10	24	17	51	15%
その他	14	16	14	44	13%
	119	136	93	348	100%

表16 事前訪問（予備学習）の際に実習目的及び課題をスーパーバイザーと検討したか

	1998	1999	2000	計	%
検討した	53	62	41	156	47%
検討しなかった	57	68	43	168	50%
N A	4	0	5	9	3%
	114	130	89	333	100%

## 5 実習先の受け入れ

「施設の実習生受け入れの意識」については、「後継者養成として受け入れていたように思う」が59%、「特にこれといった考えはなかったように思う」が15%であった。「大学からの依頼で仕方なく受け入れていたように思う」も7%あった（表15）。

「事前訪問で実習目的や課題をスーパーバイザーと検討したか」については、「検討した」が47%、「検討しなかった」が50%であった（表16）。

「あなたの実習に対する施設の評価」は、「まあまあ評価されていると思う」が68%、「よく評価されていると思う」が15%で、8割以上は、評価されていると考えている（表17）。

## 6 実習の事前学習や実習課題の追求について

「自己の事前学習」について、「まあまあ学習したと思う」が59%、「十分に学習して臨んだ」8%であった。「不十分だった」が31%おり、3割の者は、自己の事前学習が充分でなかったと考え

ている（表18）。また、事前学習の授業内容については、「どちらかといえば役に立った」が68%、「かなり役立った」が21%で、おおむね約9割は事前学習の授業が役立ったと答えている。しかし、「あまり役立たなかった」と答えた者も9%いた。

「実習課題の追求」については、「まあまあ追求できた」が75%、「かなり追求できた」が15%で、9割の者は課題の追求ができていない（表19）。

## 7 実習現場の実践、専門性等について

「実習終了後の社会福祉実践についてのイメージ」について、「理論を実践に生かすのは難しい」が50%、「理論は実践に生かされている」が41%であった（表20）。理論が実践に生かされていると答えた者は、「施設職員の意識が高い」、「知識の深さや人間性」を感じたものが多かったようである。理論を実践に生かすのは難しいと感じた者は、「施設の仕事の忙しさ」、「人手不足」などをあげている。「現場の専門性」については、「思っていたより専門性が高い」が47%、「思っていたより専門性が低い」が17%、「どちらともいえない

表 17 実習に対する施設側の評価

	1998	1999	2000	計	%
よく評価されていると思う	15	16	20	51	15%
まあまあ評価されていると思う	77	98	52	227	68%
あまり評価がよくなかったと思う	16	14	11	41	12%
N A	6	2	6	14	4%
	114	130	89	333	100%

表 18 自己の事前学習について

	1998	1999	2000	計	%
十分に学習して臨んだ	7	16	4	27	8%
まあまあ学習した	65	73	58	196	59%
不十分だった	42	39	24	105	31%
ほとんどやらなかった	0	2	3	5	1%
N A	0	0	1	1	0%
	114	130	90	334	100%

表 19 実習課題の追求

	1998	1999	2000	計	%
かなり追求出来た	15	22	14	51	15%
まあまあ追求出来た	88	94	67	249	75%
あまり出来なかった	11	13	7	31	9%
ほとんど出来なかった	0	2	1	3	1%
	114	131	89	334	100%

表 20 実習終了後、福祉の実践現場及び社会福祉実践のついでイメージ

	1998	1999	2000	計	%
実践には理論は必要ない	2	3	2	7	2%
理論は実践に生かされている	50	59	27	136	41%
理論と実践とは掛け離れていた	5	7	8	20	6%
理論を実践に生かすのは難しい	54	63	50	167	50%
N A	3	0	2	5	1%
	114	132	89	335	100%

表 21 実践現場の専門性について

	1998	1999	2000	計	%
思っていたより専門性は高い	51	70	37	158	47%
思っていたより専門性は低い	22	15	18	55	17%
どちらとも言えない	35	44	31	110	33%
その他	3	1	3	7	2%
N A	3	0	0	3	1%
	114	130	89	333	100%



表22 職場の雰囲気について

	1998	1999	2000	計	%
雰囲気はよい	76	84	56	216	65%
普通	36	40	28	104	31%
余りよくない	2	6	4	12	4%
悪い	0	0	1	1	0%
	114	130	89	333	100%

い」が33%で、どちらともいえないは、職員によって差が大きいことをあげている(表21)。

「職場の雰囲気について」は、「雰囲気はよい」が65%、「普通」が31%であった(表22)。

## 8 福祉学習の意欲の変化、実習の主な目的

「実習前と後の福祉学習の意欲の変化」については、「どちらかといえば高まった」が43%、「非常に意欲は高まった」が42%であった(表23)。意識が高まったことについて、「利用者の現状を知ることができたから」、「利用者や施設について

どうしたらよいかを考えていきたいと思うようになった」などの意見が書かれている。

「実習の主な目的」については、「現場のことを知りたいから」が87%、「社会福祉士資格を取るため」が73%、「将来福祉分野で働きたいから」が50%であった(表24)。

「実習目的の達成の程度」について%であらわしたところ、「70~80%」が64%、「90%以上」が18%で6割以上の学生が、約8割の達成感を得ている(表25)。

表23 実習前と実習後の福祉学習意欲の変化

	1998	1999	2000	計	%
非常に意欲は高まった	42	62	37	141	42%
どちらかと言えば高まった	57	48	38	143	43%
実習前と変わらない	13	16	10	39	12%
どちらかと言えば意欲は低くなった	2	3	3	8	2%
実習前より意欲は低くなった	0	1	1	2	1%
	114	130	89	333	100%

表24 実習の主な目的(複数回答 3ヶ選択)

	1998	1999	2000	計	%
社会福祉士資格を取るため	86	90	66	242	73%
現場のことを知りたいから	99	112	78	289	87%
将来福祉分野で働きたいから	64	58	47	169	50%
援助技術を学びたいから	33	36	23	92	28%
社会福祉を学ぶからには実習をしてみたかった	28	53	26	107	32%
	310	349	240	899	

N = 333

表 25 実習目的の達成度

	1998	1999	2000	計	%
90%以上	14	23	23	60	18%
70%～80%	71	87	55	213	64%
50%位	27	17	10	54	16%
20%～30%	2	4	0	6	2%
NA	0	0	1	1	0%
	114	131	89	334	100%

## 9 将来の進路について

「卒業後の仕事」については、「社会福祉の専門職（公務員などを含む）」が57%、「一般企業」が24%であった（表26）。その分野については、「医療、精神保健」が24%、「児童福祉」が22%であり、3位が「障害福祉」18%となっている（表27）。

一方、一般企業を希望する者の選択理由は、「一般企業でやりたいことがある」25%、「労働条件がよい」23%、「専門職に向いていない」21%

であった（表28）。なお、卒業後社会福祉専門職、一般企業に就職を希望しているもののみ回答する質問であったが、それ以外の者もこの質問に回答している。

また、卒業後、すぐには社会福祉の現場に就職しないと考えている者のなかに、「将来、いつか社会福祉の専門職につきたい」と考えている者が72%いる。これらの学生は、「一度は、一般企業で働いて、経験を積んでから社会福祉の仕事をし

表 26 卒業後の進路

	1998	1999	2000	計	%
社会福祉の専門職（公務員等を含む）	71	83	51	205	57%
一般企業	19	33	35	87	24%
進学	7	8	9	24	7%
就職しない	0	4	3	7	2%
その他	14	16	2	32	9%
NA	3	0	0	3	1%
	114	144	100	358	100%

表 27 仕事分野についての考え（問 26 で社会福祉の専門職と回答した者）

	1998	1999	2000	計	%
老人福祉	13	17	9	39	16%
児童福祉	19	25	10	54	22%
障害福祉	16	19	8	43	18%
医療、精神保健	19	21	17	57	24%
行政	9	17	10	36	15%
その他	3	7	3	13	5%
	79	106	57	242	100%

表 28 一般企業を望む理由（問 26 で一般企業と回答した者）

	1998	1999	2000	計	%
専門職に向いていない	1	14	8	23	21%
給料が高い	2	1	5	8	7%
労働条件が良い	10	6	9	25	23%
厚生施設に恵まれている	0	1	0	1	1%
やりたいことがある	5	11	11	27	25%
その他	4	8	11	23	21%
	22	41	44	107	100%

表 29 将来社会福祉の専門職につきたいと考えているか（問 26 で社会福祉の専門職以外との回答した者のみ）

	1998	1999	2000	計	%
いつかつきたい	20	35	29	84	72%
まだ、考えていない	8	10	9	27	23%
その他	3	2	1	6	5%
	31	47	39	117	100%

たい」や、「社会福祉の仕事は、社会の刺激を受けにくい」、「すぐには、福祉の仕事をする自信がない」などの理由をあげている。

## 10 まとめ

多くの者が、実習で「勉強になった」と考えており、真面目に実習に取り組んでいる。実習の内容は、同行訪問や同席面接で、利用者とじっくり話をしたり面接をするというよりは、「ケース記録を読んだ」り、ケアワークなどの実習が多い。また、実習で勉強になったことは、「現場のことがよく分かった」、「専門職の意見を聞くことができた」、「自己覚知に役に立った」であった。学生が考える実習の目的は、「現場のことを知りたい」、「社会福祉士の資格を取るため」が1、2位を占めているが、将来福祉現場で働くための実習と考えている者も半数いる。しかし、専門職業人の養成という実習本来の目的の学生への伝達が不足しており、それを自覚していない学生もいる。しかしながら、実習を終えて学生は、大変成長してキャ

ンパスに戻ってくる。机上の学問、勉強だけでなく、社会福祉の現場を知り、彼女たちはその後の勉学に大きな影響を受け、将来について、社会福祉について真剣に考え、検討する態度が見られた。また、適切な自己覚知や自己洞察に至った学生もいた。

現在は、多くの学生は3年次に実習に行く。そのため、卒業後の進路については、社会福祉現場をあげているが、実際の就職になると、アンケートとは逆に一般企業への就職者が約7割を占める現状がある。しかし、「いつかは社会福祉の専門職につきたい」との考えを実行に移すであろうことを期待している。

## 註

- 1) 社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容の改正について（通知）厚生省社会・援護局長平成11年11月11日付